

成人女性の葛藤：ワーク・ライフ・バランス，子育て，母娘関係をめぐる概観

鹿児島純心女子大学大学院	若 本 純 子
鹿児島純心女子大学大学院	上加世田 寛子 ^{※1}
鹿児島純心女子大学大学院	宮 内 七 菜 ^{※1}
鹿児島純心女子大学大学院	吉 田 ゆ り

要旨

本稿では成人女性の葛藤についての研究の概観を行った。成人女性に葛藤をもたらすと考えられるワーク・ライフ・バランス，子育て，母と娘との関係をテーマとする諸研究の検討から，価値観の移行期である現代に固有の葛藤の諸相が明らかにされた。

キーワード：成人女性，ワーク・ライフ・バランス，子育て，母娘関係

I.はじめに：成人女性に関する心理学研究の動向

1. 成人女性のアイデンティティ発達：Eriksonから女性独自のモデルの構築へ

近年，人生後半の心理学研究は急速に進んでおり，特に中高年期研究の充実ぶりは目覚ましい（遠藤，2005）。その端緒となったのはEriksonが提唱した心理社会的発達理論であろう（Erikson, 1950）。アイデンティティの発達を鍵概念として，生涯発達を精緻に理論化したという点でEriksonの功績は大きい。

とは言え，黎明期の成人期研究は西欧的な男性のライフパスや男性的価値観を前提としたものであった。Eriksonのモデルもその例にもれない。このような研究動向に対する批判から，女性独自の発達モデルを志向する気運が生まれた。たとえばジェンダーの視座にあるGilligan(1982)は，女性固有の心理発達論を早期に提唱した代表的な理論家である。

昨今の海外における成人発達研究は，大規模縦断研究で行われるのが一般的であるが，その中でもMills College, Radcliff, Smith College, University of Michiganの女子卒業生を対象としたものは著名で，成人女性の発達に関する知見を数多く提供している。そのひとつであるMills

College 卒業生の女性を対象とした縦断的研究において，Josselson(1996)は，大学生から中年期に至る女性のアイデンティティ・ステータスの様態は，変化する場合，持続する場合さまざまであるが，その発達過程には人間関係が重要な要素となることを示した。すなわち，女性のアイデンティティ発達とは，Eriksonのモデルに言われるような分離を前提とした個の確立に基づくのではなく，他者との関係において進展していくことが示唆された。

わが国において，同様の観点から成人女性の発達を探究している代表的な研究者として岡本祐子が挙げられる。岡本は，面接などによる数多くの実証的研究（e.g., 岡本，1985）によって，中年期をとらえ直しの時期とするアイデンティティの再構成過程を示唆し，ラセン型の発達モデルを体系化した。その中で，女性においては，家族との関係性やケアの提供などがアイデンティティを育てる土壌になるとしている（岡本，1999，2002）。それ以降も，わが国の心理学界では，彼女の先駆的な研究を引き継ぐ形で，さまざまな研究者が独自の視点を導入しながら成人女性のアイデンティティ発達研究を進めている（e.g., 職業：堀内，1993，相互自立－依存傾向：三枚，1998；子の巣立ち：清水，2004）。

※1 人間科学研究科 心理臨床学専攻1年

2. 社会変動と成人女性の発達

もうひとり、国内の成人女性発達の代表的な研究者として柏木恵子を挙げることができる。柏木の成人女性の発達論は、女性がここ数十年の社会変動による大きな影響を直接的かつ端的に受けている存在であるとし、成人女性の発達と社会的要因との相互作用を重視する点に特徴がある。

たとえば、近年の高学歴化が、従来の女性が家庭機能を担うとする性役割観を揺るがし、現代の成人女性は家庭機能のみを生きがいとはできなくなったとする。これが、子育ての中での「自分だけが取り残される」との焦りや「子どもによって自分の人生が制限されている」という葛藤につながるとし、現代の成人女性が抱える子育てに対する葛藤はむしろ必然的なものであり、「個」としての志向を反映するものとして肯定的に受けとめられている。また、少子化と長寿化の波が、女性にとっての子産み・子育てを人生の選択肢のひとつとして相対化する一方、子育てを終えた後の人生を自分らしく生きるための模索を促進してきたと述べている（柏木、1995、1998、2003）。

ここから、現代の成人女性は人生観・役割観・職業観などの移行期にあるがゆえに、特有の葛藤を抱えていると推察される。

3. 本稿の構成

本稿は、成人女性についての心理学研究を概観するにあたり、成人女性の葛藤に関連が深いテーマとして、ワーク・ライフ・バランス、子育て、母娘関係に焦点づける。ワーク・ライフ・バランスは「家庭か仕事か」の選択あるいは両立をめぐる若い成人女性の最大の課題であり、子育ては成人女性の生活における中核として高い関与が払われる。そして母娘関係は、育てられる者から育てる者への、またケアする者からケアされる者への相互的な移行による影響を含む、いずれも興味深いテーマである。別の言い方をすれば、本稿は成人女性の発達過程に沿って、それぞれの時期に対してcriticalな影響をもつテーマに焦点づけながら、心理学の知見を整理していく試みである。

Ⅱ.成人女性のワーク・ライフ・バランス：家庭と仕事をめぐる葛藤

昨今、ワーク・ライフ・バランスという語が盛んに使われている。これは、2007年、当時の政府が「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」および「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）推進のための行動指針」として策定したものに基づいている（内閣府、2007）。少子化対策、男女共同参画、労働形態や条件の一般的な改革に関わるもので、人間が人間らしく生きるために仕事と生活のバランスをとれるよう様々な取り組みが進められている。このテーマは、成人女性にとってはことさらに重大な意味をもつ。なぜなら、仕事と生活のバランスをめぐる葛藤は、女性に対してより大きな負荷を与えるためである。

1. 家庭か仕事か：成人女性に迫られる選択

Levinson(1978)は、成人へのライフストーリーをもとに、成人期の発達段階説を提唱した。それによると、22歳から28歳頃までは、自分と大人の世界とを無理なく結び付けられるような生活構造を作り上げるための模索の時期であるという。また、28歳から33歳頃までを30歳の過渡期とし、20代の間に築いた生活構造を見直す最後のチャンスであり、焦燥感が生まれ、多くの人にとってストレスに満ちた変化の時であるという。

わが国の成人女性に目を転じてみよう。現代日本において、56.2%の青年が短大および大学に進学している（文部科学省、2009）。そして、学生生活の終わりと同時に職業選択が行われる。言い換えれば、現代日本においては、青年期から成人期への移行と、新たな生活構造を作り上げる過程は、就職を契機になされる。この点に男女の相違はない。しかし、職業人としての生活が数年経過し、自らの家庭を構築しようとする際、Levinsonが言う30歳の過渡期において、女性は男性にはほとんど求められない選択の必要性に迫られる。すなわち結婚・出産か仕事かという選択である。ここには、現代の日本社会がいまだに母親による

子育てを最良とする風潮を残しており，女性が子育て・家事の中心的担い手であることが望ましいとの通念が影響を与えている（柏木・永久，1999）。そして，現代女性たちは「家庭か仕事か」という葛藤か，「家庭も仕事も」という多重役割をおのずと抱えるようになる（若本，2008）。

このような状況は現代日本の成人女性に特徴的なものであるがゆえに，成人女性の発達を考慮するにあたっては，選択のあり方，選択に伴う葛藤についてのより詳細で具体的な検討が必要となろう。というのも，どのような選択をするにせよ，女性は何らかの形で——たとえば理想と現実との間で葛藤や後悔を感じたりなど——危機crisis的経験をすると考えられ，そこでは個人の志向性やライフヒストリーに応じた多様性が想定されるためである。

2. 現代日本における成人女性の仕事をめぐって

成人女性の就業の現状 1986年の男女雇用機会均等法や，2005年の改正育児・介護休業法が施行されたことにより，女性の就業率は上がり，女性にとっては仕事と家庭を両立しうる時代になっているはずである（徳永，2006）。しかし，実際は，女性の就労率を特徴づけるM字型曲線——20代の就労率は，結婚・出産の時期である20代後半～30代にかけて落ち込み，子育てが一段落した40歳前後から再び高まり第2のピークを形作る傾向——のうち，20代後半～30代にかけてのくぼみの部分が徐々に上方にシフトしていく傾向は観察されているものの，多くの女性が結婚・出産・育児を契機に労働市場から撤退してしまうというパターンは依然として大きく変わる気配はない（中馬ら，1999；徳永，2006）。

これらの現象を成人女性のライフスタイルのみに起因することはできない。馬場（1989）が，女性が仕事を続けていくためには，本人の能力ややる気だけでなく，その他の状況が整っていないと難しいと述べていることなどは，その明らかな根拠である。特に，妊娠している女性では，これまでの日常生活が制限されたり，有職女性では仕事

の中断や退職など仕事の継続を断念せざるを得ないような強い挫折を経験することも少なくない（中西，1995）。

成人女性の就業をめぐる理想と現実 現代は，結婚をしたら主婦となり家庭に入り，子どもを産み，育てることが当たり前と考えられていた時代とは異なり，子どもを産んでも仕事を続けたいと思っている女性も増えている。そのような中で，当の成人女性は生き方についてどのような理想を持っているのだろうか。井上・井森・西村・大井（2007）によると，子どもが生まれたら家で育児をし，子どもに手がからなくなったら再び仕事（常勤職）に戻るというM字型のライフコースを理想としている女性が多いと言う。しかし現実には，出産や子育てのため一度退職をすると，正規社員に戻ることは難しい。女性が結婚後，特に出産後に職業生活を継続するには，仕事を行うことに対する伴侶の理解と育児支援が必要であるが（奥村，2006），それだけでなく，育児休業制度などの会社側の体制づくりや理解も，女性が出産後に復職するのに必要な資源である（永瀬，1999，2002）。また，仙田（2002）によると，事務職や販売・サービス職で就業継続率が低く，専門職や現場労働職で就業継続率が高いという傾向が確認されており，職種によっても就業を継続するかに違いが見られている。

このように，依然として現代の日本においては，成人女性はライフイベントに連動し就業形態を変えている（小泉・野村，2006；徳永，2006）。というよりもむしろ，結婚・出産という家庭をめぐるライフイベントによって，就業形態を変えざるを得ないのが実情であろう。家庭をもつことになった成人女性がそれ以前と同じスタイルで仕事を続けることは難しく，自分の理想どおりのライフコースを選択できるとは限らない。よって，そこにはさまざまな葛藤が伴うことが推測される。

3. 成人女性の「家庭か仕事か」の選択を規定する要因と選択後のライフコースにおける葛藤

成人女性が「家庭か仕事か」を選択せねばなら

ない状況に置かれる時、それにどう対処するかのパターンとしては、家庭をとり仕事をやめる人、仕事をとり家庭や子どもをもつことをあきらめる人、家庭と仕事の両立を目指す人の3パターンを挙げることができる。本項では、その選択がどのような要因によってなされるのか、また選択の結果として得られたライフコースに特有の葛藤について概観する。

成人女性の志向性 ライフコースの選択の違いを生み出す心理的要因にはどのようなものがあるのだろうか。この関心に応えるべく、成人女性の生き方に対する志向性に注目した検討を行っている研究群がある。たとえば奥村（2006）や岡本（2008）は、女性を2つのタイプに大別し、アイデンティティ発達の観点から女性の就業に関して言及している。一つは自らの意思と行動によって、自らを生かせる職場を求めている「個の確立志向型」で、もう一つは、たとえ興味のない仕事であったとしても、周りの人を助けるような役割を自ら担い、人に喜んでもらうことで仕事にやりがいを感じたり、仕事を通じて自分の存在価値を見つけたりする「関係性志向型」である。

「個の確立志向型」の人々は、「個としての自分」と「母親としての自分」との間に葛藤を体験しており、数々の知恵や工夫、周囲のサポートで乗り切ろうとしている。それに対して「関係性志向型」の人々は、子育てなどの家族との生活に深く関与しており、家族をはじめとする「関係性」の中で葛藤を体験しているという（岡本，2008）。しかし、奥村（2006）は、前者の「個の確立志向型」の女性も、出産・育児の経験によって、アイデンティティパターンが「個」から「関係性」へ移るという現象が見られることを指摘している。

これらのことから、女性が仕事を続けるか、仕事を辞めて家庭に入るかには、「個」を志向するか、「関係性」を志向するかという、成人女性各人の生き方に対する志向性が影響を及ぼす。さらに、若い時には「個」を志向した人でも、子どもを産むと「個」から「関係性」へと発達の移行をたどるとの知見から、成人女性は子どもを産み

育てることによって、より関係志向的になり、その背景には社会的に与えられた性役割意識の存在が考えられる。しかし、成人女性の発達過程において「個」から「関係性」への志向性の移行が生じることと、子育てとを安易に結びつけることは、「母性愛神話」（大日向，1988）に代表される誤った（より正確に言うならば生涯発達心理学から見て妥当な根拠を伴わない）子育て通念につながりかねないため、慎重でなければならない。

専業主婦、有職女性それぞれの葛藤 「家庭か仕事か」の選択の後、家庭をとり仕事をやめた成人女性は専業主婦となり、家庭と仕事の両立を目指す女性は有職女性となる。それぞれのライフコースには固有の葛藤が存在する。ここでは、専業主婦と有職の母親の育児に対する感情に注目して、成人女性の葛藤を概観していく。

荒牧・無藤（2008）は、専業主婦の方が有職の母親よりも育児負担感が高いことを指摘している。また、フルタイム群の母親の育児における肯定感、専業主婦やパートタイマー群よりも高いという結果が出ており、母親が仕事を持ち、育児と自分の仕事とを両立させている方が、育児を肯定的に捉え、楽しめているとの推察を行っている。この研究以外にも、専業主婦の心理的ストレスの大きさ、精神的健康度や自己評価等の低さを指摘する研究は多い（e.g., 堀内，1993；岡本，2002）。しかし、このような違いが何によってもたらされるかについての議論は十分ではない。若本（2006，2008）は、専業主婦の自己評価が有職女性と比較して低いことのひとつの説明として、仕事が社会的評価とともに労働対価を得られるのに対して、家事・親業（育児）は労働に対する正当な対価を得られず、「できて当たり前なのにできてほめられない」営みであることに由来するのではないかと述べている。専業主婦の心理的背景については、さらに多角的な観点から検討を加えなければならない。

それでは、有職女性が抱える葛藤やストレスはどのようなものだろうか。松浦ら（2008）は、仕事と家庭の両立を選択した女性に関して、自己

決定、価値ある目的の選択、コントロール能力が、精神的健康を損ねないための要因になることを示唆している。このことから、自らが選択した道で、自分なりの目的があれば、葛藤が生じたとしてもその葛藤を何らかの形で解消でき、精神的健康を保てるのではないかと考えられる。また、加藤・金井(2006)は、“時間葛藤”(仕事と家庭の両立により時間がないことから生じる葛藤)と“家庭-仕事葛藤”(家庭が仕事を阻害するときの葛藤)が不満足感や精神的健康の悪化に直接つながることを示した。

一方、先述した松浦ら(2008)は、労働時間の長さが精神的健康を悪化させることに必ずしもつながらないことを明らかにしており、長時間労働できる環境の背景に、家族や就労先のソーシャルサポート要因がある可能性や、葛藤が高い状況でも精神的健康を維持する要因があることを示唆している。職場からのサポートは、女性たちのキャリア意識を高めたり、職務への満足感を高めたりするが、サポートが不十分な場合には、キャリア意識や満足感を損ない、ストレス反応を引き起こすことが示され、家庭と仕事の両立という過重労働を続けようとするには、仕事自体に魅力がなければならぬ点も多く、研究が指摘するところである(佐野・若林, 1992; 三野・金光, 2002; 伊藤・相良・池田, 2004)。

以上、専業主婦、有職女性というライフコースを選んだ成人女性の葛藤について概観してきたが、もうひとつのライフコースの選択肢である仕事をとり家庭をあきらめた成人女性についての心理学的研究は、著者の知る限り存在しない。成人女性の母集団では少数のためであろうが、今後このライフコースを選択する女性の増加が考えられるため、検討の必要性があるだろう。

4. まとめ

ここでは、成人女性の家庭と仕事をめぐる研究を概観してきた。若い成人女性にとって最も重大な課題であるワーク・ライフ・バランスをめぐっては、今後さらなる研究が必要である。たとえば、

先行研究では、成人女性における「個」から「関係」への志向性の発達の移行が、その人が望む形で生じるのか否かについて議論されていない。高学歴化が進む今日、職業において自己実現を目指す成人女性は増加している。したがって、「個」から「関係性」へと志向が変化する過程において、大きな葛藤を抱える成人女性が存在するかもしれない。

加えて、選択の結果であるライフコースの違いを独立変数とする差の検討にとどまらず、選択時の状況——たとえば、その人の意志や意向がどの程度反映されてその選択肢が選ばれたのか、選択前に抱いていた理想と現実とのギャップの大きさなど、多様な変数を導入しての検討を行う必要があるだろう。

Ⅲ.成人女性の子育てをめぐる葛藤

現代日本において、子どもを持つことは、伝統的な母性観や性役割観よりも、本人の意志決定にもとづく選択として考えられるようになってきている(Beck-Gernsheim, 1995; 柏木, 2001)。子を産み育てるという行為が女性の選択に委ねられるようになったからこそ、人生の中で子育て期のものつ心理的リスクが現代女性に生じうるものになったともいえ、様々な葛藤状況が存在することは想像に難くない。その葛藤状況とはどのようなものであるのか。女性の生き方に子育て期の葛藤はどのような影響を及ぼすのか。これらの点について諸研究の動向をまとめていく。

1. 親になることをめぐって

Erikson (1982) は、後期成人期の発達課題を“世話”“生殖”としたが、親となり子どもを養育する過程は、この発達課題の経験に他ならない。

親準備性 人は子どもを産んだからといって即、親になるわけではなく、そこにはさまざまな準備が必要である。この親準備性について、たとえば小嶋(1988)は、親準備性には養護性、すなわち

子どもの健全な発達を促進するための共感性と技能が重要な要素であり、準備性を育む過程は幼児期から始まると述べている。井上・深谷(1983)は、親準備性が確立されるための条件として①両親から愛された記憶、②心理的安定感のある家族で育った記憶、③親との同一化、④異性への健康な関心、⑤性役割の受容の5つの条件を挙げ、幼児期からすでにその基盤づくりがはじまるとしている。

親としての自己の変化 岡本(1994)は、親となる経験そのものが、自己やアイデンティティの変化を引き起こし、ひとつの心理的危機をひきおこすとしたが、その一方で親となる経験を生涯発達における成長要因ととらえる研究も多い。

柏木・若松(1994)は、親になることで柔軟性を持ち、視野が広がり、自己抑制や自己の強さなど、自己概念に変化が見られるとしている。さらに小野寺(2003)は、産後2年間において、女性は母親になることで自尊感情が低下し、社会に関わる自分が小さくなり母親としての自分が拡充するといった変化はあるが、職業や生き方を通しての自己概念は比較的安定していると報告している。また同様の指摘として、氏家らによる一連の研究では、母親になることが心理的に不安定・不適応な状態をもたらす——具体的には、行動や感情調整が困難になる、依存的になる、自己評価が低下する——が、それは一時的であり、子育てという営み、それに携わる母親としての自分自身への適応は、より持続的で積極的な発達の意味を持つと結論づけている(氏家, 1996; 氏家・高濱, 1994)。すなわち子育てを経る中で、女性が“おとな”への移行を遂げるとする考え方である。

2. 子育て不安をめぐって

子どもの誕生によって起こる混乱とは、具体的にどのようなものか。広義の「子育て不安」(本稿では、育児への否定的な感情について包括的に示すことばとしてこの語を用い、育児不安、育児困難、育児ストレスを含むものとする)についての研究は多い。その端緒となったのが、牧野の一

連の研究である。牧野(1982)は「育児不安とは、子どもや子育てに対する蓄積された漫然としたおそれを含む情緒の状態」と定義し、子育て不安は、子ども育ちへの影響のみならず、母親本人の抑うつや虐待行為などの心理的リスクをももたらすとした。この画期的な指摘以降、育児における母親の心理に対する注目が始まったとも言えるだろう。

その後の研究文脈において、なぜ子育て不安は生じるのか、何が子育て不安につながるのかという研究が盛んに行われてきた。ここでは、こうした子育て不安をひきおこす要因についての研究を概観する。

社会学的大規模調査による規定要因の検討 服部・原田(1991)は、大阪市において、子どもの環境と発達との関連を検討するために0歳から6歳まで追跡調査を行った(大阪レポート)。彼女らは、子育ての中心的問題のひとつが子育て不安であることを指摘し、その要因として、①母親が子どもの欲求がわからない、②母親に具体的な心配事が多いものの、解決方法がわからないため放置してしまっている、③出産前に子どもとの接触経験や育児経験が不足、④夫の育児への参加や協力が得られない、⑤近所に母親の話し相手がいないの5つを挙げている。この大阪レポートを受けて、兵庫県において新規の項目を加えた調査の結果(兵庫レポート, 原田, 2006)、①, ②, ③, ④は大阪レポートと同様の結果であったこと、さらに⑤の話し相手については、支持的でない話し相手がいても不安は解消されないことが明らかにされた。また、大阪レポートで示された要因に加えて、⑥イメージしていた育児と現実との大きなギャップの存在、⑦自分の育児に自信が持てない、⑧子どもへの関わり方がわからないといった新たな要因、さらに、母親の就労と子育て不安には相関が認められなかったことが報告された。

しかし、母親の就労と子育て不安に関しては別の見解も見られる。たとえば佐々木(1996)は、横浜市における調査から、働く主婦よりも専業主婦がより子育てを苦痛だと感じていること、不安

になりやすいことを示している（同様の研究に冬木, 2000；永久, 1995；清水, 2003など）。さらに佐々木(1996)では，子育て不安をもつのは孤立感を感じている母親であることも報告しているが，これらの母親の孤立とは，近年マスコミ等により社会問題化した「密室育児」（長坂，2002）を示したものと言えよう。

規定要因に関する心理学的検討 社会的文脈状況に注目した子育て不安研究が数多くなされる一方，心理学的観点からの検討も増加している。

牧野(1985)の，子育て不安は夫婦関係の良し悪しに多大な影響を受けるとの言に代表されるように，母親の子育てに対する感情を規定する最大の要因は夫婦関係とされる。夫婦関係が子育て不安に対してもつ強い規定力を示唆する実証例は数多く存在するが（e.g., 平林・飛田, 1998；岩藤・無藤, 2007），子育てを通して得られる経験が夫婦関係を捉え直す機会となることを示す研究もあり（目良，2001），夫婦関係のあり方と子育てとの関連は，成人発達過程に影響を及ぼすと考えられる。

他方，規定要因を多数想定し，総合的・包括的観点から子育て不安について検討した研究も見られる。岩藤・無藤(2007)は，母親自身の要素として結婚年数，家族形態，年齢，就労の有無，さらに夫の要素として夫の年収，夫の労働時間，夫の妻の妊娠についての意識等の子育て不安を規定する要因についての詳細な分析を行った。その結果，妊娠期においては妻の学歴と抑うつとの関連が高く，産後6ヶ月では夫の収入，1年では夫の就労時間が母親の抑うつ状態と関連が高いとした。同様に大日向(1989)も，子どもの発達につれて母親の子育て不安が変化することを指摘している。これらの研究では，子育て不安が，母親のパーソナリティや社会状況などの単相的な要因ではなく，子育て期の時間経過なども含めた多相的な要因で形成される発達の所産であることを示唆していると言えよう。

子育て不安の概念的捉え直し これらの研究動向と並行し，昨今では，子育て不安そのものを多

相的・複合的なものとして捉えた検討が増加している。たとえば住田・中田(1999)は，子育て不安を①育児についての一般的な不安感情，②子どもの成長・発達に対する不安，③母親自身の育児能力に対する不安，④育児負担感，育児束縛感による不安の4つに分類している。また荒牧・無藤(2008)は，育児への負担感，育て方・育ち方への不安感，子育ての肯定感の3つの視点から捉えている。

子育て支援への応用 多様な規定要因を用いて子育て不安の検討を行った岩藤・無藤(2007)が，子育て不安の軽減には道具的なサポートよりも情緒的サポートが必要であると指摘しているが，現在，子育て不安研究は，子育て支援のあるべき方向性についての議論へと展開している。前述の牧野(1983)は，自身の定義した育児不安において，母親が子どもに適した態度で接することを重視するとともに，母親がひとりの女性として社会的学習の場へ参加したり，仕事に従事することの必要性を述べている。支援の実際と動向については本稿では言及しないが，現在，子育て不安に対する支援は，これまでの規定要因等の研究成果を踏まえ，問題解決的支援，情緒的支援，社会的支援などとして実践されている。

3. 子育てにともなう心理的リスク

母親たちの中には，育児が負担になり，さまざまな心理的リスクに陥る場合もある。

母親の抑うつ 育児ストレスによって母親が抑うつ状態になること，さらにそれが子育てに及ぼす影響についての研究も近年多く報告されている。抑うつは生涯を通して発症の可能性があるが，子育てに関連する好発期として妊娠期と産後期が挙げられる。安藤(2009)は，産後抑うつを産後1年に限定して調査した。その結果，妊娠中に抑うつを経験している場合には産後にも継続する傾向があること，繰り返し思考と自己注目等の認知特性の影響が大きいこと，さらには一時的に困難を体験し抑うつになった場合には時間と共に回復するが，妊娠自体に否定的である場合には抑うつ

が継続することを指摘している。こうした母親の抑うつは、産後期を過ぎ、子どもが成長してもリスクが減少するわけではない。安藤ら(2008)は、幼稚園児の母親のうち、家事専従の母親に関しては周産期と変わらない割合で抑うつが認められることを見出した。また、親となる以前に抑うつ傾向にあった母親が、子育ての負担感や困難観によって抑うつ症状が悪化した(佐藤・菅原・戸田・島・北村, 1994)との報告も見受けられる。

4. 自分自身の育てられ方との向き合い

鯨岡(2002)は、親になることとは「育てる」ことの世代間リサイクルであるとし「将来〈育てる者〉になるいま〈育てられる者〉が、かつて〈育てられる者〉であったいま〈育てる者〉との『育てられる一育てる』という関係の中で、次第に次世代の〈育てる者〉になっていく過程である」(p.84.)と述べている。自分の子どもへの働きかけは、かつて子どもであった自分自身が受けた親の働きかけを思い起こし、一方で自分の両親への、他方では我が子への二重の同一化を生み出す。よってこの二重化された同一性をくぐり抜けてこそ親になる、という鯨岡の論(2002)は、子育て期における心理的リスクが自分自身の育てられ方との関連が深いことを示唆する。換言すると、子どもを育てる経験は自身の育てられ方との向き合うことを余儀なくされ、それが心理的リスクとなりうるということが想定される。

虐待の世代間伝達 斉藤(1996)は被虐待経験を持つ母親は、自らの子どもへ虐待行動をとると述べている。虐待の世代間伝達については、母親の被虐待経験の有無だけではなく、幼児期に十分な愛着を形成できなかったと思われる母親の我が子への虐待行動につながるとした研究も多い(衣笠, 2000; 今野, 2001; 今野・水谷・星野, 2001; 鶴飼, 2000)。植田(2002)が行った育児困難を訴えた母親の入院治療経過の報告の中でも、育児困難の背景に母親自身の生育上の問題・養育的な母子関係の未経験が育児困難を生じやすかったとの指摘がある。一方で、田邊・米澤(20

09)は、母親の被養育体験は自分の子どもの養育を規定する可能性は相対的に高いかもしれないが、同時に母親の生育上の問題や被養育体験までを視野に入れたサポートにより、虐待行為の連鎖は断ち切ることができるとしている(同様の指摘に今野, 2001)。

愛着(アタッチメント)の世代間伝達 被養育体験を論じる際に愛着(アタッチメント)の形成が要因としてあげられる。数井・遠藤・田中・坂上・菅沼(2000)は、青年・成人期の愛着に注目し、母親の愛着様式が子どもの愛着形成に影響することを見出した。しかし、母親の愛着様式は過去の被養育体験に起因するというより、親となった現在の愛着様式によるものであることを実証した。遠藤(1992)も、愛着の世代間伝達を展望した論の中で、着目すべきは想起される自らの被養育経験の質が否定的であっても、現在安定した内的作業モデルを有し、自分の子に感受性豊かに対応できる親の存在であると言及している。母親は、親になることで自らの育てられ方に向き合い、それが虐待や子育て不安といったリスクにつながることもある。しかし、母親の育てる者としての育ちを適切にサポートすることによって、世代間伝達は負の意味のみならず、鯨岡(2002)のいう命の世代間リサイクルに転化されうると言えよう。

5. まとめ：生涯発達の観点の必要性

ここでは子育てに焦点づけ、さまざまな研究を概観してきた。そこから見えてきたのは、子育てを一時点に限定して捉えることがいかに無為かである。

徳田(2004)は、ナラティブアプローチを用いた母親へのインタビューから、「母親としての自分を受け入れがたい」と感じている母親であっても、子育てを自らの成長課題として意味づけようとする心理過程を見出した。

母親が、育児中心の生活やひとりの個としての生き方をめぐって起こる葛藤や困難を受け入れ、何らかの方略を見出そうとする過程とは、親としての成長や母親自身の価値観の変化などで説明さ

れるに留まらない。母親自身が、自分にとって子育て期がどのような意味を持つかについて真摯に向き合い、自らの中におさめていこうとする成人発達過程に他ならない。したがって、今後の子育て研究では、「いま子育て期にあるひとりの成人女性」の生涯にわたる発達を見通そうとする志向が拡大・充実していくことが望まれよう。

IV. 成人女性の母娘関係に伴う葛藤

1. 母娘関係の特殊性

青年期以降の子をもつ親子関係における父親と母親の違い 親と子を対象とした研究は数多く存在し、その中でも青年期を迎える親子研究においては、親からの心理的離乳・独立・離脱が発達課題とされ、これらに至るまでの過程が検討されている (e.g., 小高, 2008; 落合・佐藤, 1996; 岡本・上地, 1999)。この時期をめぐる父親、母親は、子どもの自立と葛藤に耐え、見守るだけでなく、それぞれが異なった立場から積極的に子どもの発達に関与するといわれている (杉村, 1995)。

しかし、父親と母親ではその関与の仕方や子どもとの関係のあり方に違いがあることが明らかにされている。たとえば渡邊 (2003) は、青年期・成人期の娘・息子の母・父との情緒的依存・絆の意識についての研究を行い、息子・娘ともに父親との依存・絆意識は母親の依存・絆意識に比べて弱いことを明らかにした。このことは、母親は父親に比べて子育ての主たる責任を負うことが多く、子どもたちの自立をめぐる葛藤や議論に日常的に参加する機会が多いといわれていることから説明できるであろう。さらに、岡本・上地 (1999) は、母親のイメージは中学生になることで崩壊の過程をたどり、その後息子は依存からの離脱が見られるが、娘においては再び母親との心理的距離を接近させることが明らかになっている。この指摘は、息子に比べ娘では、母親ときわめて情緒的に親密な関係が意識され、青年期以降も依存・絆

の意識を次第に強めていくとの示唆 (渡邊, 2003) と同様である。したがって、娘の場合と息子の場合では、中学生から大学生に至る母親との関係の発達的变化は異なると考えられる。

また、母親が子どもに対して抱く期待や感情においても、息子と娘では異なることが示されている。高木 (2008) によると、母親は娘に対し、「自分の理解者」「一緒にいると楽しい」など一心同体の感覚が強く、将来に対する世話の期待や娘の人生に介入していきたいという気持ちを抱いており、息子よりその期待や気持ちは強いとの結果が得られている。

母娘関係の特殊性を生み出す女性固有の心理的要素 前述したような親子関係における父親と母親の違いはどのようにして生じるのか。成人女性のアイデンティティに注目する研究群において、たとえば岡本 (1999) は、私たち人間が持つ一個の個人として存在する側面と他者との関係の中で生きている側面の2側面のうち、女性は男性以上に他者との関係の中で生活しており、他者との愛着や結びつきを重要視しているためであると説明している。換言すれば、最も身近な他者である家族の中で起こる変化やできごとは女性にとって重要な意味を持ち、父親に比べ母親が、息子に比べ娘が、他者との関係を求めている。したがって、家族の中においては、その他者が母親や娘となり、互いに求めあう関係となりやすいであろうと推測される。

また、鯨岡 (2005) は、「育てられるものが育てるものになる」時間軸上の関係変容過程を強調し、その変容過程は世代間リサイクルの側面を持つとした。そして、育てられる者と育てる者は、それぞれ「未来の大人」「かつての子ども」というように、お互いに重なり合い、互いに同一化を向ける関係であるとの考えを示している。女性は「産む性」としての存在であることから、子どもを産み育てるという共通の営みを持つ可能性が高い。このような面からも、女性同士である母娘関係が、家族の中において、特殊な関係となるのかもしれない。

2. 母娘関係の発達の变化

青年期以降の娘と母親との関係はどのように変化していくのであろうか。ここでは子どもの発達段階に沿って概観していきたい。久保田(2009)は、中学生と大学生の娘とその母親に課題を実施する中で、母娘関係を観察し、比較を行った。その結果、課題遂行時、中学生の娘と母親は、母親が親として子どもを援助する側にまわり、子どもを中心に課題を進めていく一方で、大学生の娘と母親は、対等な関係で課題を進めていることが明らかになった。この結果は、娘の発達に伴い、母親の関わり方が異なってくることを示唆したものである。

成人期の娘と母親の関係に関してもさまざまな研究がある。たとえば北村・無藤(2001)は、娘と母親双方のデータを用いた研究において、娘を独身群、結婚群、出産群にわけ、発達の移行を検討した。その結果、娘の出産により母親との関係が変化していることを見出した。さらに、富岡・高橋(2005)は、グラウンテッド・セオリー・アプローチによる研究を行い、娘が親になるという体験や育児困難などの母親との共有体験により、母親との関係を振り返るようになるとした。そして、母親に対して新しい解釈や理解を持つことで母と娘の関係が変化することを示した。看護の分野においても同様の視点から研究がなされており、長鶴(2006)は、妊娠や出産を通して娘は母親をモデル化し、親へと移行する、その移行の中で、母親と心理的結びつきを強めていくことを明らかにしている。

以上の先行研究の概観から、青年期の母娘関係においては、母親が、親すなわち援助者としての役割から双方がひとりの女性として対等な関係へと変化する中で、母と娘の心理的距離が近くなること、そして、成人期においては、娘の結婚や出産など新たな家庭を構築するライフイベントを契機に娘が母親との関係を振り返り、捉えなおす過程の中で母娘関係が質的に変容していくことがわかる。

3. 青年期以降の母娘関係が母親・娘双方の発達へと与える影響

青年期以降の娘と母親との関係は娘の発達に伴い、質的な変化を遂げていくが、この変化は母娘双方の発達に影響を与えていく。まず娘の発達への影響から概観していきたい。

母娘関係が娘の発達に与える影響 母親と娘の関係の中には、「友達同士関係の母娘」や「一卵性母娘」などとも表現されるような、過度に親密な場合も見受けられる。とくに日本の場合には、就職後も結婚後も、親と同居しながら「子ども」として振舞い続けている娘が少なくない(高木, 2008)。娘にとって、母親と親密な関係でいることは、母親からの経済的な支援を受けることができる、同年輩からは得られないメリットを得ることができる。娘にとっては、親を頼り、いつまでも子どもでいられることは、さまざまなメリットを享受できる。たとえば、自分の結婚、出産の際には、母親からのサポートを容易に得られる。出産の際の母親からのサポートや母親との親密な関係は産後の抑うつを軽減するとも言われており(岡山・高橋, 2006)、母娘が親密な関係であることによって、娘の精神的健康に対して肯定的な影響がもたらされると考えられる。

しかし、母と娘の密接すぎる関係にはデメリットも伴うことが指摘されている。北村(2008)は、独身女性においては、過去の母親との関係に関する記憶や、現在の母親との関係に対する感情のいずれもが、抑うつ傾向や自尊感情などの心理的適応性に影響を与えていることを明らかにし、過去においても現在においても母親との関係が重要な役割を果たしていることを示した。具体的には、現在の母親に対する親密な感情が娘の自尊感情に影響を与える一方で、母親との依存的な感情に関しては、抑うつ傾向へと影響を及ぼすことを示し、母親への依存的感情の否定的な側面を明らかにした。さらに、北村(2001)は、母と娘の間のサポートに焦点をあてて研究を行った結果、母親からサポートを受け取ることが多いと母親との親密性および依存性が高まるという傾向を示した。ここで

は、母親の娘に対する世話を焼き過ぎる傾向が、自分の依存欲求を満たすためのものであることが示唆されており、母娘間の相互依存のリスクを表している。母親への過剰な依存は成人の心理的適応にとってマイナス影響を与える(北村・無藤, 2001)との結果をも併せると、相互依存的な関係は娘の発達を阻害する可能性も含んでいることが考えられる。高木(2008)も、両者で求め合い、密着した依存的な関係となることで引き起こされる現代の母娘関係の危うさを指摘し、母親からの行き過ぎた介入や干渉に苦しむ娘の事例をあげている。母親側から見れば、一見仲が良くて平和に見える母娘関係が、娘側からすれば「個」の部分を見失ってしまう不幸な関係にもなりうるとの彼女の言は的を射たものであろう。

母娘関係が母親の発達へ与える影響 続いて、母娘関係のありようが母親の成人発達に与える影響について考えていきたい。

杉村(1995)は、近年わが国では、少子化と高齢化の影響によって子育てを終えた後の期間が延長したことから、現代の中年期女性にとっては、この長い期間をどう生きるかということが重要な課題となったことを指摘している。40代から50代にかけて、子どもたちが大学に入ったり、就職したり、家を離れるなどして、成人女性が母親としての役割を徐々に終える時期は「空の巣期」と表現される(e.g., Thomas, 1997)。この時期の成人女性は、うつや無気力など心理的リスク状態になりやすいといわれ、その否定的側面が注目されてきた。

しかし、昨今は別の指摘もある。清水(2004)は、中年期女性を対象にして子の巣立ちと母親自身のアイデンティティの関連についての研究を行った。その結果、子どもの年齢や就職などの社会的に自立したかという物理的な側面でなく、母親自身が「子が巣立った」と認識するという主観的な側面によって、自分自身のアイデンティティへと目を向けていくことにつながることを明らかにした。これは、子の巣立ちが母親の主観的認識を介在し、成人発達を促進するという過程を記述した

ものと考えられる。さらに、清水(2001)では、子の巣立ちの時期にある成人女性は、現在の娘の状態とその年頃の自分自身の経験と照合しながら、娘の成長を認めようとする事が明らかにされており、成人女性は娘との同一視を通して自らのアイデンティティを再考するという相互作用過程が示された。

また、北村・無藤(2003)は、成人の娘との母娘関係を母親による報告から捉え、娘との関係が親密性や子育て満足感などを示す肯定的な関係であると母親の自己確立感は高くなり、娘へ過剰な依存や喪失感などを示す依存的な関係であると母親の抑うつ傾向が高くなることを示した。つまり、中年期における自己確立感を左右するものの一つとして母娘関係が機能すると言えるだろう。

4. まとめ

ここでは、青年期以降の娘と母親との関係について概観してきた。さまざまな知見が積み重ねられている一方で、結婚前の青年後期あるいは若い成人期における母娘関係がどのようなものであるのか、加えて、結婚、出産など新たな家庭を構築するライフイベント以外に母娘関係を変容させる要因は存在するのだろうか、さらに、結婚、出産などのライフイベントを経験しない成人女性と母親との関係は変容するのかなどについては十分に検討されていない。また、日本においては母娘の関係の強さは、誰に介護を望むか、誰が介護を担当するかといった介護問題とも密接に関連している。したがって、母娘関係は、今後、高齢期にまで対象を広げての検討が望まれる。

V. おわりに：今後の成人女性研究に向けて

本稿では、成人女性の葛藤を生むテーマとして、ワーク・ライフ・バランス，子育て，母娘関係をあげ、先行研究を概観した。そこから明らかになったのは、成人女性の心性およびそれに影響を与える諸要因に対しては、少子化，超高齢化，高学歴

化、非婚・晩婚化といった現代社会を代表するキーワードが常にかかわっているということである。したがって、今後の研究においては、現代日本の成人女性が置かれている独自の社会的文脈と内的状態双方に、また双方の相互作用にも注目した検討が必要である。

しかし、遠藤(2003)が、成人発達研究全般において男性を含む研究が寡少である点を批判しているように、女性独自の心性を検討することと、女性のみを対象とした研究を行うことは同義ではない。たとえば母親である成人女性の心性を問う際には、それと対になる父親研究も並行して進めていくことにより、研究の内的・外的妥当性と実効性を高めていくと思われる。

また、わが国は2005年以降、65歳人口が20%超である超高齢化社会に突入し、超高齢社会も目前である。女性は男性よりも10歳近く長い平均寿命を有しており、人生の終末期における発達と適応という課題がより厳しく問われている(下仲, 1999も同様の指摘)。よって、成人女性研究は、高齢期(それこそ超高齢期を含め)に至るまでの生涯的過程として行われる必要がある。

付記 本稿は、第1著者が他著者の研究関心をもとに企画し、分担執筆を依頼した。また、各著者の草稿に対して、構成、表現などの統一をはかるために手を入れ、最終稿とした。各人の分担は以下のとおりである。第2著者：Ⅳ部担当、第3著者：Ⅱ部担当、第4著者：Ⅲ部担当、第1著者：Ⅰ部、Ⅴ部、要旨他。

文献

- 安藤智子(2009)：産後抑うつ予防・介入の視点から 発達, 30(120), 4-12.
- 安藤智子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香(2008)：幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ 保育学研究, 46(2), 99-108.
- 荒牧美佐子・無藤隆(2008)：育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に 発達心理学研究, 19, 87-97.
- 馬場房子(1989)：働く女性のメンタルヘルス 同朋舎
- Beck-Gernsheim(1995)：こどもをもつという選択(木村育代, 訳) 勁草書房. (*Elisabeth Beck-Gernsheim(1989), Die Kinderfrage: Frauen zwischen Kinderwunsch und*

Unabhängigkeit, C.H.Beck'sche Verlag.)

- 中馬宏之・富田安信・脇坂明・野間敦子・室山晴美・金子能宏・森田陽子(1999)：女性の職業・キャリア意識と就業行動に関する研究 日本労働研究機構 No.99
- 遠藤利彦(1992)：内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東洋大学教育学部紀要, 32, 203-220.
- 遠藤利彦(2003)：最近の研究動向：発達 日本教育心理学会(編) 教育心理学ハンドブック 有斐閣 pp.85-92.
- 遠藤利彦(2005)：発達心理学の新しいかたちを探る 遠藤利彦(編著) 心理学の新しいかたち6 発達心理学の新しいかたち 誠信書房 pp.3-52.
- Erikson, E.H.(1982)：ライフサイクル, その完結(村瀬孝雄・近藤邦夫, 訳) みすず書房. (*Erikson, E.H.(1982)The Life Cycle Completed: A Review. New York: Norton*)
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- 冬木春子(2000)：乳幼児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因 現代の社会病理, 15, 39-56.
- Gilligan, C. (1986)：もうひとつの声 岩男寿美子(監訳) 川島書店. (Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Boston: Harvard University Press.
- 原田正文(2006)：子育ての変貌と次世代育成支援 名古屋大学出版会
- 服部祥子・原田正文(1991)：乳幼児の身心発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点 名古屋大学出版会
- 平林秀美・飛田操(1998)：母親の育児意識に及ぼす末子の年齢と夫からのサポート認知の影響 福島大学生涯学習研究センター年報, 3, 65-69.
- 堀内和美(1993)：中年期女性が報告する自我同一性の変化：専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較 教育心理学研究, 41, 11-21.
- 井上俊哉・井森澄江・西村純一・大井京子(2007)：成人女性の生きがいに関する生涯発達心理学的研究Ⅲ—女性の生き方の理想と実際— 東京家政大学研究紀要, 47, 169-176.
- 井上義郎・深谷和子(1983)：青年の親準備性をめぐって 周産期医学, 13(12), 2249-2250.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子(2004)：既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響 心理学研究 75, 435-441.
- 岩藤裕美・無藤隆(2007)：産前・産後における夫婦の抑うつ性と親密性の因果関係—第一子出産の夫婦を対象とした縦断研究から 家族心理学研究, 21, 124-145.
- Josselson, R.(1996)：*Revising herself: The story of women's identity from college to midlife*. New York: Oxford University Press.
- 柏木恵子(1995)：親の発達心理学—今、よい親とはなにか— 岩波書店
- 柏木恵子(1998)(編)：結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房

- 柏木恵子(2001)：子どもという価値—少子化時代の女性の心理
中公新書
- 柏木恵子(2003)：家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの
視点— 東京大学出版会
- 柏木恵子・永久ひさ子(1999)：女性における子どもの価値：今，
なぜ子を産むか 教育心理学研究，47，170-179.
- 柏木恵子・若松素子(1994)：「親となる」ことによる人格発達：
生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究，5，
72-83.
- 加藤容子・金井篤子(2006)：共働き家庭における仕事家庭両立
葛藤への対処行動の効果 心理学研究，76，511-518.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹(2000)：
日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究，48，
323-332.
- 衣笠紀玖子(2000)：母親の育児態度と意識及び日常生活—母親
の生育歴（たたかれ経験）と配偶者の母親への態度などから
の検討 チャイルドヘルス，3(9)，52-57.
- 北村琴美(2001)：成人の娘とその母親における相互間のサポー
ト お茶の水女子大学人間文化論叢，4，119-130.
- 北村琴美(2008)：過去および現在の母娘関係と成人女性の心理
的適応性—愛着感情と抑うつ傾向，自尊感情との関連 心理
学研究，79，116-124.
- 北村琴美・無藤隆(2001)：成人の娘の心理的適応と母娘関係：
娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理
学研究，12，46-57.
- 北村琴美・無藤隆(2003)：中年期女性が報告する娘との関係と
心理的適応との関連 心理学研究，74，9-18.
- 小高 恵(2008)：青年の親への態度についての発達の变化—心
理的離乳過程のモデルの提案— 太成学院大学院紀要，10，
31-48.
- 小泉静子・野村直美(2006)：女性の就業における就業形態経験
の影響に関する分析 *Works Review*，1，50-61.
- 小嶋秀夫(1988)：親となる心の準備 繁田進・大日向雅美（編）
母性—こころ・からだ・社会 新曜社 pp.313-323.
- 今野義孝(2001)：わが子虐待の世代間伝達は断ち切れるか 特
殊教育学研究，39(2)，53-59.
- 今野義孝・水谷徹・星野常夫(2001)：わが子虐待の早期発見と
早期教育に関する考察—母子の愛着形成とわが子虐待の予防—
教育学部紀要 文教大学教育学部，35，105-117.
- 久保田桂子(2009)：青年期の母娘関係の発達差—会話分析によ
る青年期前期と後期の交流の比較— 心理学研究，79，530-
535.
- 鯨岡峻(2002)：「育てられる者」から「育てる者」へ—関係発
達の視点から 日本放送出版
- 鯨岡峻(2005)：関係発達論の構築—間主観的アプローチによる—
ミネルヴァ書房
- Levinson, D.J.(1978) : *The Seasons of Man's Life*. New
York : Alfred A. Knopf.
- 牧野カツ子(1981)：育児における＜不安＞について 家庭教育
研究所紀要，2，41-51.
- 牧野カツ子(1982)：乳幼児をもつ母親の生活と育児不安 家庭
教育研究所紀要，3，34-56.
- 牧野カツ子(1983)：働く母親と育児不安 家庭教育研究所紀要，
4，67-77.
- 松浦素子・菅原ますみ・酒井厚・眞榮城和美・田中麻未・天羽
幸子・託摩武俊(2008)：成人期の女性のワーク・ファミリー・
コンフリクトと精神的健康との関連—パーソナリティの調節
効果の観点から パーソナリティ研究，18，149-158.
- 目良秋子(2001)：父親と母親の子育てによる人格発達 発達研
究，16，87-98.
- 三野節子・金光義弘(2002)：女性就労者におけるキャリア・ス
トレスの心理学的考察—キャリア・ストレス・モデルを用い
た地域差の検討— 川崎医療福祉学会誌，12(1)，67-74.
- 三萩奈穂(1998)：成人女性における自我同一性感覚について—相
互協調的・相互独立的自己感との関連から— 教育心理学研究，
46，229-239.
- 文部科学省(2009)：就園率・進学率の推移(昭和25年度-平成21
年度)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsfiles/afieldfile/2009/08/06/1282571_5.pdf
- 永久ひさ子(1995)：専業主婦における子どもの位置と生活感情
母子研究，16，50-57.
- 長坂典子(2002)：家庭という“密室”での育児 こころの科学，
103，50-56.
- 永瀬伸子(1999)：少子化の要因：就業環境が価値観の変化か—
既婚者の就業形態選択と出産時期の選択— 人口問題研究，
55(2)，1-18.
- 永瀬伸子(2002)：若年層の雇用と非正規化と結婚行動 人口問
題研究，58(2)，22-35.
- 長鶴美佐子(2006)：周産期の実母との関係性が産褥1カ月の褥
婦のメンタルヘルスに及ぼす影響 母性衛生，46(4)，550-
559.
- 内閣府(2007)：仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）
ホームページ <http://www8.cao.go.jp/wlb/>
- 中西信男(1995)：ライフキャリアの心理学 自己実現と成人期
ナカニシヤ出版
- 落合良行・佐藤有耕(1996)：親子関係の変化からみた心理的離
乳への過程の分析 教育心理学研究，44，11-22.
- 岡本清孝・土地安昭(1999)：第二の個体化の過程からみた親子
関係および友人関係 教育心理学研究，47，247-258.
- 岡本祐子(1985)：中年期の自我同一性に対する研究 教育心理
学研究，33，295-306.
- 岡本祐子(1994)：女性のためのライフサイクル心理学 福村出
版
- 岡本祐子(1999)：女性の生涯発達とアイデンティティー個とし
ての発達・かかわりの中での成熟— 北大路書房
- 岡本祐子(編著)(2002)：アイデンティティ生涯発達論の射程
ミネルヴァ書房
- 岡本祐子(2008)：女性のライフサイクルとこころの危機—「個
と「関係性」からみた成人女性のこころの悩み 加茂登志子

- (編) こころの科学, 141, 18-24.
- 岡山久代・高橋真理(2006): 妊娠期における初妊婦と実母の関係性の発達の变化 母性衛生, 47, 455-463.
- 奥村幸治(2006): 女性の職業への意欲, コミットメントの変化とライフイベント *Works Review*, 1, 74-8.
- 小野寺敦子(2003): 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14, 180-190.
- 大日向雅美(1988): 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証 川島書店
- 大日向雅美(1989): 育児に伴う母親の不安 小児看護, 12 (4), 415-420.
- 斉藤学(1996): アダルト・チルドレンと家族—心の中の子どもを癒す 学陽書房
- 佐野幸子・若林満(1992): 働く女性のキャリア満足に関する研究 経営行動科学, 7, 47-57.
- 佐々木正美(1996): 育児不安の解消は, 孤独・孤立の解消からこどもの未来, 303, 12-14.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊紀(1994): 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, 64, 409-416.
- 仙田幸子(2002): 既婚女性の就業継続と育児資源の関係—職種と出生コホートを手がかりにして— 人口問題研究, 58(2), 2-21.
- 清水紀子(2001): 「しなやかなアイデンティティ」定義に向けての議論—「語り」による, 子の巣立ちの体験から— 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, 1, 19-35.
- 清水紀子(2004): 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ 発達心理学研究, 15, 52-64.
- 清水嘉子(2003): 母親の育児に対する信念と育児ストレスの関係 小児保健研究, 62(5), 558-568.
- 下仲順子(1999): 老化の心理学的アプローチ 折茂 肇(編) 新老年学(第2版) 東京大学出版会 pp.1325-1340.
- 杉村和美(1995): ライフサイクル—男性と女性— 南博文・やまだようこ(編) 講座生涯発達心理学5 老いることの意味 金子書房, pp.117-152.
- 住田正樹・中田周作(1999): 父親の育児態度と母親の育児不安 九州大学大学院教育学研究紀要, 2, 19-98.
- 高木紀子(2008): 母における娘への思い 柏木恵子(監修) 塘利枝子・福島朋子・永山ひさ子・大野祥子(編) 発達家族心理学を拓く 家族と社会と個人をつなぐ視座 ナカニシヤ出版 pp.38-44.
- 田邊恭子・米澤好史(2009): 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達—母親像に着目した子育て支援への提案— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19, 19-28.
- Thomas, S. P. (1997): Psychosocial correlates of women's self-rated physical health in middle adulthood. In M. E. Lachman & J. B. James. (Eds.) *Multiple paths of midlife development*. Chicago: The University of Chicago Press. pp.257-291.
- 徳田治子(2004): ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から 発達心理学研究, 15, 13-26.
- 徳永英子(2006): 女性のキャリアパスの類型化に関する研究 *Works Review* 1, 62-73.
- 富岡麻由子・高橋道子(2005): 親への移行期にある娘のとらえる母親との関係性: 再構築の過程とその要因 東京学芸大学紀要1部門, 56, 137-148.
- 植田聡美・橋口浩志・徳丸潤・山下直子・三山吉夫(2002): 育児困難を訴えた母親への支援 九州神経精神医学, 48(1), 40-46.
- 氏家達夫・高濱裕子(1994): 3人の母親: その適応過程についての追跡的研究 発達心理学研究, 5, 123-136.
- 氏家達夫(1996): 親になるプロセス 金子書房
- 鶴飼奈津子(2000): 児童虐待の世代間伝達に関する一考察—過去の研究と今後の展望— 心理臨床学研究, 18, 402-411.
- 若本純子(2006): 成人の自己の発達に, 「役割」が果たす意味とは—職業役割, 親役割 内田伸子(編) 発達心理学キーワード 有斐閣 pp.162-163.
- 若本純子(2008): 親としての成長, 親としての変貌 安藤智子・無藤隆(編) 子育て支援の心理学 有斐閣コンパクト pp.89-105.
- 渡邊恵子(2003): 母親と娘はなぜ親密か—青年期から成人期にわたって— 柏木恵子・高橋恵子(編) 心理学とジェンダー学習と研究のために 有斐閣 pp.31-36.

Abstract

The conflicts in women: A review focused on work-life-balance, rearing children, and mother-daughter relationships in adulthood.

We reviewed studies on conflicts in women focused on work-life-balance, rearing children, and mother-daughter relationships in adulthood. It was revealed that the contemporary conflicts in women had various aspects and reflected transition of value.

KeyWords : Women in adulthood, Work-life-balance, Rearing children, Mother-daughter relationships